

『今月の天候と農作業』

通巻第5536号
10月号
平成23年9月30日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【九州南部1か月予報】
向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	30	50	20
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	40	40	20

【概要】

天気は数日の周期で変わるでしょう。平年に比べ曇りや雨の日が多い見込みです。
向こう1か月の平均気温は、平年並の確率50%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、低い確率60%です。2週目は、高い確率50%です。

〈1週目の予報〉 10月1日(土)～10月7日(金)

天気は、数日の周期で変わり、期間の中頃に雨の降る日があるでしょう。

(詳しくは週間天気予報をご利用ください。)

気温は、低い確率60%です。

〈2週目の予報〉 10月8日(土)～10月14日(金)

天気は、数日の周期で変わるでしょう。

気温は、高い確率50%です。

〈3週目から4週目の予報〉 10月15日(土)～10月28日(金)

天気は、数日の周期で変わるでしょう。

〈次回の発表予定等〉

1か月予報：毎週金曜日 14時30分 次回は10月7日

3か月予報：10月25日(火曜日) 14時

普通作物

◆ 普通期水稻

1 適期収穫

収穫作業が始まりましたが、収穫適期は全籾数の8割程度が黄化したときで、水田ごとに籾色をよく観察し収穫しましょう。倒伏したところでは茶米や穂発芽等が発生しますので、刈り分けを行い全体の品質が低下しないよう努めましょう。浸冠水で水田にゴミが流入していると、収穫機械が故障することもありますのであらかじめ除去しましょう。熟期の遅い「まいひかり」の収穫は今月下旬となるので、収穫5日前までは間断かん水で根の活性を保ちます。

2 適正な乾燥調整

出荷時の望ましい玄米水分は14.5～15.0%です。急激な乾燥をせず、熱風温度40度以下の適正な乾燥を行いましょう。

3 農作業安全

10月は農繁期となることから、例年農作業事故が多発しています。農作業の前には、農道・農業機械・服装等の仕業点検を実施し、ゆとりのある作業計画に心がけ、事故防止に努めましょう。

◆ 大豆

1 排水対策等

子実肥大期にあります。ほ場内に水が溜まらないよう排水溝を整備しましょう。逆に晴天が続き干ばつが心配される場合は、子実が十分肥大しないことがあります。畦間に走り水を行い、品質の良い大豆を生産しましょう。

2 病虫害防除

カメムシとハスモンヨトウの発生が見られます。カメムシの加害が激しいと、莢の肥大が停止し、株は収穫時期になっても青立ちのままとなります。ほ場を観察し遅れないよう防除を行いましょう。

◆ ソバ

今年は播種直後の台風被害により、株数の減少がみられます。今後、子実が肥大しますので、引き続き排水対策を徹底しましょう。

(鎌田 博人)

果菜類

◆ 共通事項

急な冷え込みに備え、暖房機の点検・整備を行うとともにダクトの設置など、いつでも稼動可能な状態にします。ハウス内の二重ビニルの被覆が終わっていないほ場については、早めに作業を終え、いつでも保温ができるよう準備しましょう。

暖房用燃料の節減には、ハウス内の気密性を高めることが重要です。ハウスの外張ビニルに破損や隙間がないか確認しましょう。また、内張ビニルは谷部やサイド部分のつなぎ目に隙間ができやすくなりますので、丁寧な作業を心掛けましょう。

◆ きゅうり

ハウス抑制栽培は主枝の収穫期、側枝の発生から収穫期となります。側枝の発生をよくするため、やや多目のかん水を行うとともに主枝の摘芯が遅れないよう注意します。

追肥は、生育が順調な時期から始め、1回目は主枝摘芯の1週間前、その後側枝の果実肥大が始まる時期から定期的に施用します。側枝の収穫開始以降は、収穫の最盛期を迎えますので、草勢が低下しないよう注意しましょう。また、光線の透過を良くするために、主枝の摘芯後、中段の葉から順次摘葉を行いましょ。

促成栽培は育苗期の後半から定植時期となります。苗床では、徒長しないよう昼間十分日光に当て、本葉2.5枚以降は昼温25度前後、夜間は14度を下限に管理します。

◆ピーマン

促成ピーマンは定植から整枝・誘引期になります。この段階での枝づくりが年内だけでなく、全期間の収量を左右しますので、注意を要します。第2分枝を主枝としますが、第3分枝が強い場合には、ねん枝等を行い主枝の伸長を促します。また、着果が多く、草勢が弱い場合には、1～2番果を摘果し、草勢を維持するなど初期の樹体づくりに努めます。かん水は畦全体に十分かかるように行いますが、軟弱徒長を防止するために過剰なかん水は控えます。

◆トマト

促成栽培の大玉トマトやミニトマトでは、定植後に異常茎（メガネ）の発生を抑制するため、かん水量を制限した管理を行っていますが、大玉トマトでは、第1花房の肥大が始まる第3花房開花期、ミニトマトでは、第5花房開花期を目安にかん水、追肥を開始します。かん水は草勢を見ながら行いますが、かん水開始時期が遅れると肥大不良や生理障害等の発生が懸念されるためタイミングを失しないよう注意してください。

（郡司 孝幸）

葉茎菜類及びいも類

◆キャベツ・レタス

キャベツは、は種後120日から150日で収穫期を迎えるため、結球具合をみながら随時収穫しましょう。

レタスは、12月出荷の定植期にあたり、2～3月出荷のは種期となります。生育適温は15度から20度ですので、本ぽでは12月上旬にはトンネル被覆が必要となります。

◆たまねぎ

翌春3月以降に出荷する作型のは種期となります。播種床には、10㎡当たり完熟堆肥40kg、苦土石灰1.5kg、低度化成2kg程度を施用し、遅くとも中旬までには、は種してください。

◆しょうが

降霜の前に収穫することが必要となるため、霜の早い地区では下旬頃から収穫期に入ります。掘り上げたら、できるだけ早く茎を切り落とし、茎やシートで塊茎を覆って乾燥を防ぎましょう。

◆食用かんしょ

5～6月に植え付けたものの収穫期です。食用かんしょは生育日数が130日以上になると、過肥大となりいもの形や皮色が悪くなりますので、今月中には収穫を終えましょう。

◆さといも

中生種の収穫期となります。例年8月～9月の孫いも肥大期の高温乾燥により、いもの芽の部分が陥没する「芽つぶれ症」の発生が予想されますので、出荷時には注意が必要となります。また、「枯れ上がり症状」の見られたほ場や、「芽つぶれ症」、「乾腐病」の疑いがあるものについては翌年の種芋としては使用を避けてください。

(河野 健次郎)

果樹

1 常緑果樹

◆極早生温州みかん

収穫が終了した園地では、樹勢回復のため、施肥、かん水を行いましょ。最近では、収穫後の秋枝の発生によって、翌年の花の減少がみられますので、発芽が見られなくなる10月中旬以降に実施しましょ。また、窒素成分の葉面散布は樹勢回復に効果が高いので、5～7日間隔で3回以上行いましょ。

今年は園地や樹によって結果量にばらつきがあります。結果量が少なかった樹では、翌春の着花量が多くなり、隔年結果が激しくなります。10月中旬頃から夏秋梢の整理を行い、翌年の着花数を調整しましょ。

◆ 完熟きんかん

今年は7月上旬の花が結果した園が多く見られますが、7月下旬以降の花が結果し、肥大の遅れている園では、秋季の加温が肥大促進に効果的です。台風の接近に注意しながら早めに被覆を行い、夜温20度を目標に11月中旬まで加温し、昼間の温度は28度を目標に管理しましょう。

◆ マンゴー

花芽分化のためには、枝の充実が非常に重要なポイントとなります。今年は昨年よりも第2新梢の緑化が遅れています。緑化遅れの見られる園地では、十分にかん水を行いながら昼間の日照を確保し、夜間は20度で加温することで、緑化を促しましょう。第2新梢がすでに充実した園地では、日照を十分に確保しながら、施設を開放し、できるだけ外気温に近づけるように管理し、かん水は少なめにしましょう。第3新梢が発生した園地では、緑化不足により、花芽の着生が悪くなりますので、上、中旬に新葉や新梢の除去を行いましょう。

樹冠内に残る枯れ枝を取り除くことで、軸腐れ病の胞子を減少させ、発病を減らすことができます。加温が始まるまでに全て取り除き、ハウスの外に持ち出しましょう。

2 落葉果樹

◆ 礼肥施用

収穫後の樹勢回復が不十分だと翌年の新梢発生や開花結実が悪くなりますので、根が活発に活動している10月に施肥を行いましょう。

◆ くり

収穫後のイガは、実腐病、モモノゴマダラノメイガ等の越冬場所となり翌年の発生源となるので、土中に埋めるなど処分しましょう。

(山口和典)

花き

◆花き全般

10月に入ると夜温が低下してきます。特に中山間地域では急激に低下し、降霜の恐れもあります。病害防除の観点からも微生物農薬のダクト散布が実施できるように保温・加温の準備を早めに行ってください。

◆キク

秋ギクの主力品種である「神馬」は、10度以下の低温に遭遇すると開花遅延をおこす危険性があります。特に10月以降に定植する作型については、定植直後から低温に遭遇する恐れがありますので、早めに加温準備を行い、適正な温度管理に努めましょう。

「神馬」は系統によって生育ステージごとの適正な管理温度が異なりますので、栽培する系統に適した温度管理を確認しましょう。

◆スイートピー

今月中～下旬に発蕾・開花が始まります。草勢が弱い状態で開花・収穫を行うと、草勢が著しく低下し、減収の原因になります。中旬までに、収穫に耐えられる株づくりを行い、収穫開始は葉の大きさなどから判断を行ってください。

曇天後の強日射や高温による生長点の焼け等、気象の大幅な変動による障害が発生しやすい時期になりますので、根域を十分に確保するとともに光線管理等に気を配りましょう。

◆デルフィニウム

中山間地では8月定植分の収穫が上旬から始まります。極端にかん水を控えると花のボリュームが低下し、2番花の萌芽に影響しますので、適宜かん水や液肥の施用を行いましょう。適期の切り前で収穫し、収穫後の前処理は品質保持剤の濃度、処理時間を厳守し花落ちのない切り花を出荷しましょう。

平坦地の9月定植分については中旬頃に発蕾が始まりま

す。ボリュームを確保するためにかん水・追肥等適切な肥培管理を行ってください。

◆トルコギキョウ

生育初期に乾燥状態になると活着・発根が悪くなり切り花のボリュームが低下するので、十分にかん水しましょう。心つぶれや葉先枯れの発生しやすい品種については根系の発達を促すため、草丈が10号前後の頃にかん水を控え、根系の発達を促します。

また、今月に定植する作型では、定植後に活着を確認したら、光線不足により生育が遅れないようすみやかに遮光ネットを除去してください。

(中村 広)

畜産・飼料作物

残暑も終わり、家畜にとって、過ごしやすい季節になりました。朝夕の寒暖差が大きいので、子牛、子豚、幼雛は換気と保温に注意します。敷料が濡れたままだと、畜体の腹部が冷え下痢を発症しますので、敷料をこまめに取り替えてみましょう。

乳牛は、10月に入っても暑熱のストレスを受けます。酪農家に配布しましたヒートストレスメーターを活用し、牛舎内の温湿度指数が67（ヒートストレスメーターの黄色い部分）を下回るまで、牛舎ファンを回すなどの暑熱対策をしっかりと行いましょう。

養豚の活性汚泥処理施設は気温の低下とともに活性が悪くなりますので、余剰汚泥の処理を実施し、希釈水量、曝気量、曝気時間など調整するようにしてください。

乾燥し気温が下がると、インフルエンザなどのウイルスも活発化します。鶏舎では防鳥ネットの破れや隙間がないよう点検を徹底しましょう。鶏舎周辺の石灰消毒に加え、農場に入る人、物資、車両の消毒を行い、また農場に入る際は衣類、長靴を交換するなど、農場へウイルスが入らないよう防疫を徹底してください。

配合飼料価格は高止まりしています。低コスト生産につながる良質な自給飼料の確保に努めましょう。近隣の稲ワ

ラの確保や水田裏作でのイタリアンライグラス、エン麦の作付け拡大を行います。ほ場の土壌分析を行い適正な施肥に努めてください。その際、堆肥を有効に活用し化成肥料の使用を抑え、低コスト栽培に努めましょう。

飼料イネの普通期栽培については、ホールクroppサイレージの収穫時期を迎えます。脱粒に注意し、適正水分60～65%に予乾させ、すみやかにロール・ラッピングします。降雨直後は、水滴や土壌が茎葉に付着します。水分の上昇や土壌の混入は、品質の低下を招くばかりでなく、カビの発生にもつながります。しばらく晴天が続いてから収穫するようにしてください。

(須崎 哲也)

特用作物

◆ 茶

1 秋整枝について

秋整枝は春整枝に比べ3日程度摘採が早く、芽数が多く芽揃いが良い反面、冬期の凍寒害や晩霜害の被害を受けやすいため、立地条件と品種や中切等の栽培条件を考慮し実施します。特に、適期摘採のため、摘採幅の確保を考慮した整枝時期、方法を検討しましょう。

2 整枝の時期

秋芽が充実し、再萌芽しなくなる、平均気温18～19度以下になる頃を目安に行います。

適期は、山間地域は9月下旬～10月上旬、広域霧島地域は10月中旬、沿海地域は10月下旬頃です。

再萌芽は30%四方内に20芽以下であれば、収量・品質への影響はないとされますので、越冬芽の充実不足にならないよう適期に実施します。

また、整枝直後の低温被害回避のため、気温予報に注意し実施します。

特に、寒害を受け易い茶園では、2回に分けて整枝するか、春整枝に主体をおき、秋は徒長枝を落とす程度とします。

3 整枝の深さ

整枝の程度は最終摘採・整枝面から3～5%上が標準で

すが、葉層を8割以上は確保します。また、秋・春の2回に分けて整枝する場合は、秋は春整枝より1、2節高い位置で整枝します。

4 越冬ダニ・クワシロカイガラムシの防除

近年、暖冬や少雨に伴い、クワシロカイガラムシの第4世代の発生が見られ、また、カンザワハダニも春先の1回の防除では抑えきれない茶園が見られます。

カイガラムシはふ化状況を確認した上、多い場合は防除を実施します。ハダニは散布量と葉裏への散布状況を確認しながら密度低下を図ります。

(岩切健二)

◆しいたけ

1 ほだ木の水分管理

9～10月は、原基の形成が盛んになる時期です。この頃の原基づくりが、春子の発生量に大きく影響しますので、ほだ木の水分補給に努めましょう。

2 ほだ場の環境整備

しいたけ発生量の増大や品質向上のため、ほだ場の環境整備を行います。暗くなったほだ場は間伐や枝打ちを行い、光や降雨の入りやすい明るい環境にしましょう。また、風の強いほだ場や乾燥しやすいほだ場は、きのこの変形や発生不良を起こすので、防風ネットの設置等環境改善を行い、ほだ起こしや秋子の発生に備えましょう。

3 原木の伐採

クヌギやコナラは、通常10月下旬～11月下旬の間で、葉が3～7割程度黄葉する時期に伐採するのが適期とされていますが、同じ地域であっても、その年の気象条件や立地条件(日照、標高等)によって伐採の適期が変わります。気象や原木の状況等に注意しながら、伐採に向けた準備を始めましょう。

(田中 貴司)

◆葉たばこ

今年の南九州リーフセンターでの葉たばこの買入れが今月で終了となります。出荷まで適切な貯蔵管理を行うよう

お願いします。

今月は来年作に向けての準備が主な作業となります。

1

来年作の準備として、日当り・風通し・排水の良いほ地を早期に選定しましょう。新作地、借地については、事前に前作物の情報収集と土壌検定を実施し、来年作の施肥農薬使用の参考にしましょう。

2

土壌病害対策のため、深耕、耕運を繰り返し行い、菌密度の低下を図るため耕種的防除に努めましょう。

3

堆肥材料を十分に確保し、未熟堆肥投入を防ぐため、定期的に切り返しを行い腐熟促進に努めましょう。

4

来年の出荷規格遵守に向けて貯蔵庫、作業場の整理整頓・掃除機による清掃を行いましょう。

(中矢恭輔)

内容の詳細について

10月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び環境森林課、日本たばこ産業南九州原料本部が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://mawi.sakura.ne.jp/>)

なになに農業アラルト

加工用ほうれんそうの栽培について

1 はじめに

宮崎県は加工ほうれんそうの生産が盛んで全国シェア（H21産）1位となっています。県内の9社の食品企業で冷凍加工して全国に出荷しており、最近では平成22年に都城くみあい食品、今年8月に（株）ジェイエイフーズみやざきが新たに稼働し、今後ますます加工用ほうれんそうの栽培は盛んになると思われま

2 ほうれんそう栽培時の注意点

ほうれんそうはアカザ科の植物で、冷涼な気候（生育適温15～20度）を好みます。県内での栽培期間は高冷地を除けば、9月～6月で播種時期によって複数の品種が栽培されています。直根性で発芽後は湿害による立ち枯れが出やすいため、排水の良いほ場の選定が必要です。そのため、深層に耕盤が形成されている場合は反転プラウなど深土破碎を行います。また、好適土壌pH値は6.3～7.0と高いため、土壌分析と石灰資材による土壌pHの調整が必要です。加工用では青果用の倍程度の大きさ（草丈40～50cm）に生育させるため、堆肥施用や深耕、pHの調整等、土づくりがかかせません。

生育管理では除草対策が重要になり、除草剤（播種直後処理）と中耕機械等を利用します。播種時にほ場が乾燥しすぎている場合は発芽率の低下や除草剤の効果が劣るため、畑地かんがい用水の整備されている地域ではかん水後に播種すると発芽率が向上し、除草剤の効果も高まるので積極的に水を活用します。

収穫時には異物（草、虫、枯れ葉、枝、ゴミ）混入がないように注意します。

3 輪作の必要性

土地利用型の作物なので輪作が基本ですが、ほうれんそう後作は土壌pHが高いため、バレイショではそうか病、かんしょでは立ち枯れ病が多く発生しやすくなります。さといもやごぼうは輪作に取り入れたい品目ですが、ほうれん

そうとさといもで何年か連作するうちに、さといもで連作障害（病害虫）が出やすくなりますので、複数の品目やセンチュウ用の対抗植物等も取り入れたほ場管理が必要となります。

（河野 健次郎）



向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
野菜・花き類	ハスモンヨトウ等のチョウ目害虫	やや多	県内4地点に設置したフェロモントラップによる誘殺数は、いずれも多い状況で推移しています。幼虫が大きくなると薬剤が効きにくくなりますので、早期発見に努め若齢幼虫期に防除します。
施設野菜全般	土壌病害虫	—	台風等による大雨では場が冠水した場合は、土壌消毒の効果がなくなり、疫病や青枯病、線虫等の被害が発生する恐れがあるので、排水対策を十分行くとともに、必要に応じて再度土壌消毒を行います。
トマト	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	—	いずれのウイルスも、微小昆虫 (タバココナジラミ、ミナミキイロアザミウマ) によって媒介されるので、施設開口部には必ず防虫ネット (目合い0.4mm以下) を設置し、侵入を防止します。これらの微小昆虫は、一旦増加すると防除が難しいので、発生初期の防除が重要です。
ウリ類	黄化えそ病 (MYSV)	—	黄化えそ病 (MYSV) が、一部地域のきゅうりで確認され、徐々に拡大傾向にあることから注意が必要です。本病と疑われる症状が発生した場合は、西臼杵支庁・農林振興局 (農業改良普及センター) または病害虫防除・肥料検査センターまで連絡ください。
	キュウリ・メロン退緑黄化病 (CCYV)	—	
果樹全般	果樹カメムシ類	—	地域や時期によって発生量が大きく変動するので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。
カンキツ類 (露地栽培)	ミカンハダニ	やや多	生息密度が高くなってからでは防除効果が期待できないので、発生初期 (寄生葉率30%、または1葉当り虫数0.5~1頭) に防除します。収穫前の早生みかん等では収穫前使用日数等に注意します。
チャ	炭疽病	多	秋芽の生育期に降雨が続く場合には、秋芽生育初期から1週間間隔で2~3回防除します。同一系統薬剤の連用は避けます。
	チャノコカクモンハマキ チャハマキ チャノホソガ	やや多 多 多	ハマキ類は、巻葉してからでは防除効果が低下しますので、ほ場の発生状況に注意し、発蛾最盛期の7~10日後に防除します。 チャハマキ、チャノホソガのフェロモントラップによる誘殺数は、平年より多く推移しているため、特に幼木園では注意が必要です。
	カンザワハダニ	やや多	防除適期は越冬前の10月中下旬ですが、気象要因による変化が大きいので、茶園を観察して防除の必要性および時期を判断します。 同一系統薬剤の連用を避け、抵抗性の発現防止に留意します。
	チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ	やや多 やや多	秋整枝を行う園では特に防除の必要はありませんが、更新園や幼木園では新芽の生育期間が長く被害を受けやすいので、芽の状況に合わせて防除を行います。
	クワシロカイガラムシ	並	平年並の発生状況ですが、発生が多いほ場が一部で見られます。 薬剤散布は、噴口を茶株の中に差し込むなどして枝幹に十分かかるようにていねいに散布します。

- 1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
 2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnpn.ne.jp/miyazaki> です。